

授戒じゆかいえ

ここ永平寺では、四月の二十三日から二十九日まで報恩授戒会が行われます。私たちは日々意識する、しないに関わらず何かの罪を犯しています。例えば生命を維持するということは、他の動植物の「いのち」を賜りそれを糧としていることを鑑みればよく分かります。また身近な事例として皆さまにも、自分では何の気なしで述べた一言が、深く対象者の心を傷つけたり、逆に傷つけられたご経験などがあると思います。

こうしたことを常に忘れず、その経験を今後に生かしていくというお誓いをする行持が授戒会なのです。そのために、毎年全国から一〇〇人以上の戒弟とよばれる参加者の方がたが集まり、その方がたのお世話をすると同時に、自らもそうした罪を懺悔ざんげするために、多くの山内外の僧侶も加わる、一年を通して最も大きな行持の一つといってもよいでしょう。

会では、説戒師とよばれるお役の僧侶から、一週間を通して戒を受ける事についての説明を受けます。

我が宗門の戒とは、仏道に順じた自分自身を律する自発的な心であり、その心をおこすことこそ菩提心であることを学びます。そして、最終日には、授戒会最高責任者である戒師の不老閣下の前で直接そのお誓いをし、仏弟子となり授戒会は終わるのです。



大本山總持寺



報恩大授戒会

總持寺では毎年四月十日から十六日まで「報恩大授戒会」(お授戒会)が修行されます。曹洞宗には多くの法要がありますが、お授戒会はその最も重要な一つで、僧侶と檀信徒が一体となり七日間の修行を行う唯一の儀式です。

戒を授かるということは、仏教の根本の教えをいただくということであり、禅の心を得るといことです。戒を授ける戒師さま方は戒を授かる戒弟をよく導こうと勤め、法要に参加する僧侶はその舞台を整えようと努力します。そして戒弟は礼拝と聞法を通して戒を授かる資格を得ようと一心に励むのです。

この独特な雰囲気は、お釈迦さま在世の頃の祇園精舎にも通じるものです。

お授戒会は「一期一会」の場であります。さまざまな人生を歩んできて、これからも別々の人生を送る多くの檀信徒の方がたが、お授戒会に集まり一つの目標のもとに生活と修行を共にするので

す。生き方と戒が一つになること、これを「ぜんかいいちによ禅戒一如」といいます。

このような素晴らしい「報恩大授戒会」に、お一人でもたくさんの方の檀信徒の皆さまが参加されることを望んでやみません。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

寒波来る度シベリアの父のこと

宮城県 小西 力子

評 シベリア寒気団は日本海側に大雪をもたらし太平洋側には冷たい乾燥した空気を送る。今年も寒波が来れば厳寒のシベリヤで果てられた父上のことを思わずに居られないのだ。つぶやくような父恋の一句。

横丁へ大つごもりの包みもの

東京都 伊奈 三郎

評 大晦日の横町の風景。包みものを抱えて歩く着物姿のおかみさん。下町の古今亭志ん生の語る長屋話のような人情味は薄れ行くも寂しいが、忙しげで明るい一時代前の庶民の暮らしが見えるようである。

◆ 楽しげな手話や春着の袖ゆらし

大阪府 柏原 才子

◆ その人の瞳に負けし歌留多かな

佐賀県 池内 淳子

◆ 典座僧くんでいすり足でゆく寒の庫裏

三重県 米野てるみ

◆ 元朝や小鳥の落すもの朱き

兵庫県 美濃 敏子

◆ パソコンを休めと蜜柑呉れにけり

北海道 福島 眞也

◆ 喉仏見せて機嫌や新走り

秋田県 鈴木えい子

◆ 風呂敷をかぶってひと掃き宵の雪

長野県 下島 博

◆ 梅の香の真中に車いす置いて

東京都 野村 信廣

◆ 大根干す山より陽ざし降りてきし

愛媛県 井上 征郎

◆ 釜飯のお焦げの旨し雪の宿

静岡県 望月かほる

*選者吟

ふるさとと言ふ映像に山桜

五灰子

*作句小見

指を折りながらも、身近な出来事や心持ちを詠い続けます。その一句一句が作者の発散や吐息、救い。歩み。やがて大切な自分史となるでしょう。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

己が手を己が息にてあたたむるさびしき思
ひもちたるままに
北海道 池田 雨郷

評 言葉では言い難いさびしさというものがある。自分の息のぬくとさで、当面はやり過ぎすことの出来るほどのさびしさ、しかしそれは、またおそいくるさびしさでもある。寂寥感にくるまれながら、自足の念も伝わってくる。

漬物石えらぶ河原で我が先をこれぞこれよ
と渡る鶴鴛せせれい
愛知県 小久保左門

評 漬物の重しにするのに程よい石を探して河原を歩いていく作者。その前を鶴鴛が渡りゆく、まるで石探しに協力するかのよう。ほのぼのとした世界がひろがる。

- ◆ 星空に火の粉は上がり村人ら我が山寺の除夜の鐘撞く
東京都 小沢 芳樹
- ◆ すってんころむっくり起きて幼子はまるで仔犬だ笑って
行った
福島県 西木 甚
- ◆ 亡き母が簞笥にしまいし新品の下着身に着けぬくととき一
日
兵庫県 河本佐知代

◆ 木枯しに揺るる御堂の絵馬古び願いの文字が滲みていた
り
埼玉県 山本 直記

◆ 島々を結ぶ明るき橋渡る島に住みつゝ苦勞も知らず
岐阜県 後藤 進

◆ 福島はモルモットじゃない国あげて除染・復興早くして
くれ
福島県 大槻 弘

◆ 法要の若き僧侶がケータイを見てから静かに読経始める
秋田県 竹内 善郎

◆ 太簀に妻の名書いて四十年孫の名書く日祈りつつ待つ
新潟県 星野 三興

◆ 猫あやす老いの姿に思わずも長居したるに気付き暇す
北海道 佐賀 ユリ

◆ わが作るむかしながらの御節重たひらげにくる娘や孫が
居り
三重県 野呂 と志

* 選者詠

七くなりし十年前の手帳出づ遠き湖見のご
とひらく
ちづ

* 作歌小見

人は亡くなっても誰かの記憶に存在する限り、生き続けるのだと思います。河本さんの歌の「新品の下着」も、だからこそ温かいのでしょう。拙歌も亡くなった年だと気付いたことが、ある風景を呼び起こしてくれたように思います。